


研究報告書
2019年度:B課題

2021年12月17日

公益財団法人 がん研究振興財団
理事長 堀田知光 殿

研究施設 関西医科大学看護学部
住 所 大阪府枚方市新町二丁目2番2号
研究者氏名 橋本 理恵子 

(研究課題)

AYA 世代がん患者を支える看護相談における援助モデルの開発

2019年1月24日付助成金交付のあった標記B課題について研究が終了致しましたのでご報告いたします。

2019 年度（第 52 回）がん研究助成金（課題 B）研究報告書

研究課題名：AYA 世代がん患者を支える看護相談における援助モデルの開発 氏名：橋本理恵子 所属機関：関西医科大学看護学部

I. 研究の背景と目的

AYA（adolescents and young adults: 思春期および若年成人（15 歳以上 39 歳以下））は、発達・社会的観点からは、大きく思春期と若年成人期に分けられる。思春期は、社会的自立に向けた発達段階にあり就労前では経済的自立ができず意思決定の主体は親になりがちである。一方、若年成人は、就労し精神的・経済的に自立し自分自身が意思決定の主体となっていく時期である。一般的に思春期と若年成人では、発達課題や状況が異なるため、それぞれ異なる問題を抱えて療養することになる。

本邦における第 3 次がん対策推進基本計画では、AYA 世代のがん医療の充実を掲げ、患者の年代や個々の状況に応じたニーズに対応できるような体制整備として相談支援体制の必要性について言及している。AYA 世代がん患者は、臨床において、小児科、あるいは、成人の診療科で療養を受けることになる。成人を対象とした支援を行ってきた医療従事者にとっては、AYA 世代特有のアイデンティティ形成、発達・心理社会的課題への対応に困難を感じる可能性が高くなる。したがって、AYA 世代がん患者を支援する看護師が、AYA 世代の対象が告知時から直面する発達・心理社会的課題を理解し、継続的に相談に対応していくための援助モデルを作成することは有用であると考えられる。看護師が援助モデルを活用した看護実践を行うことで、AYA 世代がん患者が、様々な課題に直面しながらも自分らしく人生を歩むための看護支援が可能となるといえる。さらに、現在、看護援助が行き届いていない小児、成人期の挟間にある AYA 世代がん看護において、小児、成人、双方の立場から看護を考える上で看護実践の質向上に寄与することができる。

本研究の目的は、AYA 世代がん患者を支える看護相談における援助モデル開発のための、がん看護専門看護師、がん看護に関連する認定看護師が実践している相談支援の内容を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究デザイン

2. 研究対象者

AYA がん患者の相談対応の経験があるがん看護専門看護師、がん看護に関連する認定看護師

3. 研究方法

研究者が作成した半構成的インタビューガイドを用い、対面あるいは ZOOM を活用しインタビューを行った。インタビュー内容は、研究参加者に許可を得て録音を行った。対面でのインタビューはプライバシーが守れる個室で行った。

4. 分析方法

インタビューの内容は面接内容から逐語録を作成し、AYA 世代がん患者を支えるために行っている看護相談の内容について質的帰納的に分析を行った。データを繰り返し読んだ上で、言葉の前後の文脈を踏まえ、意味を損なわないよう簡潔に表現し 1 次コードとした。1 次コードを集め、比較検討し、意味内容が類似したものを集めてサブカテゴリー、カテゴリーの順に抽象度を上げ分類した。

5. 倫理的配慮

本研究は大分大学医学部倫理審査委員会（承認番号 1861）の承認後、研究者が、調査対象施設の看護部長、ならびに、がん看護専門看護師が所属している専門看護師会の責任者に研究の目的、方法等について文書と口頭で説明し承認を得た。責任者の承認後、看護部長ならびに専門看護師会の責任者から候補者の選定いただいた。研究者は、選定いただいた研究協力者に研究の目的、方法等について説明し同意を得て研究を実施した。

Ⅲ. 研究結果

1. 研究協力者の概要（表 1）

研究協力者は、がん看護専門看護師 11 名、がん関連の認定看護師 5 名、両方の資格を有する看護師 1 名であった。研究協力者の現在の所属は、外来・病棟勤務、外来化学療法室、がん相談支援センター、緩和ケアチーム、看護部管理室、大学であるが、17 名全員が AYA 世代がん患者の相談に対応した経験があった。

研究協力者とのインタビュー時間は、25 分～120 分で平均 69 分であった。

表 1 研究協力者の概要

ID	所有する資格	所属	面談時間
A	がん看護専門看護師	AYA 病棟	90 分
B	がん化学療法看護認定看護師	血液・腫瘍内科病棟	45 分
C	がん化学療法看護認定看護師	外来化学療法室	64 分
D	がん看護専門看護師	がん相談支援センター	25 分
E	がん看護専門看護師	AYA 病棟	78 分
F	がん化学療法看護認定看護師	外来化学療法室	54 分
G	がん看護専門看護師	緩和ケアチーム	92 分
H	がん看護専門看護師	看護部教育支援室	44 分
I	緩和ケア認定看護師	緩和ケアチーム	27 分
J	がん看護専門看護師	緩和ケアチーム	63 分
K	乳がん看護認定看護師 がん看護専門看護師	外来	47 分
L	がん看護専門看護師	がん相談支援センター	65 分
M	がん看護専門看護師	看護部管理室	92 分
N	がん看護専門看護師	大学教員	106 分
O	がん看護専門看護師	看護部管理室	120 分
P	緩和ケア認定看護師	緩和ケアチーム	85 分
Q	がん看護専門看護師	病棟	82 分

2. AYA 世代がん患者を支えるためにがん看護専門看護師、がん看護に関連する認定看護師が行っている相談支援の内容（表 2）

AYA 世代がん患者を支えるためにがん看護専門看護師、がん看護に関連する認定看護師（以下、看護師とする）が行っている相談支援の内容はとして、7 カテゴリー、19 サブカテゴリーが抽出された。カテゴリーは【 】サブカテゴリーは〈 〉で表記した。

看護師は、AYA 世代がん患者にとって、思いがけないがん告知・治療の意思決定の中で【患者の将来を意識した治療による妊孕性の影響を重視した調整】を行っていた。AYA 世代がん患者にとって、長く続く今後の人生を考え（将来の妊孕性について納得した方向性を目指し本意を探り調整を模索する）だけでなく、（妊孕性喪失や妊娠・養育にまつわる思いを継続的に支える）ことで、AYA 世代がん患者が、自分の将来を具体的に描きつつ治療と向き合えることを大切にされたかかわりを行っていた。さらに、看護師は、治療開始後も継続して（治療に伴うセクシャリティの問題に働きかける）よう努めることで、有害事象出現時の対応に気を配っていた。

AYA 世代がん患者は、がん治療を受けることで社会生活の中断を余儀なくされる。看護師は、社会生活の維持が AYA 世代がん患者のライフイベントとして重要な意味を持っていることを理解し【学ぶことの価値と治療の継続が担保されるよう連携調整に努める】ことや【がん罹患や治療による影響を受けた就労を再構築していく力を育み見守る】支援を意図していた。この世代にとっての生活は、家庭から学校、そして社会への大きく転換する時期であり学業や就労との両立が求められる。学業の継続という視点では（仲間と一緒に学びたい患者の思いが尊重できるよう奮闘する）ことや（学ぶことが中断されないよう意識して協働体制で対応を探る）調整を行い、患者の学びたい気持ちを第一に考えた支援を行っていた。また、就労の継続では（治療によって直面する就労への影響と向き合う患者のアシストを怠らない）ことや（社会的役割としての就労と向き合う患者の思いを察し後ろ盾をする）ことで、患者自身が自分のこととして仕事や治療を考える後押しを大切にしていた。そして、社会的役割だけでなく人生における生きがいという面では、患者の（人生にとっての就労の意味を理解し患者と共に最善の方法を探し求める）ことに伴走し患者の価値観を意識したかかわりを行っていた。

AYA 世代がん患者ががんに罹患することは、患者だけでなく家族にとっても衝撃的なできごとである。家族が動揺のなかで患者の支援をしていかなければならないことを理解し、看護師は（家族員が危機に陥らないよう心身の安定を保てるよう気遣い計らう）ことや（歴史の短い家族が困難に向き合いながら歩む力を査定し強化する）ことで【患者のがん罹患の危機を乗り越える家族単位の力を維持・強化する】調整を行っていた。さらに、家族としてがんと向き合っていけるよう、患者が（がんになったことを周囲に理解してもらおうことを支持する）ことで患者を中心に家族としての力を育むよう配慮をしていた。

AYA 世代がん患者は、生きる中でのさまざまな経験が少なく対処も未熟であるため、看護師は AYA 世代のがん患者ががんに立ち向かうことの難しさを理解し【脆弱な心を理解して患者のレジリエンスを支え続ける】ことを大切にしていた。看護師は（発達段階にある患者の心身の脆さを理解し強さを育んでいく）ことで（予期せぬがんに罹患し将来を奪われた心情にある患者を支える）ことを注視し支援の継続を行っていた。AYA 世代がん患者は、がんと闘病で社会生活における様々なことをあきらめたり中断したりすることが多い状況の中で、看護師は（がんによる喪失体験の中で希望を持てる瞬間を意識する）ことで患者個々の状況を踏まえたかかわりを行っていた。

AYA 世代がん患者にとっての療養は、壮年期、老年期のがん患者と共に療養する機会が多いことや、患者自身が他者との関係を作っていくことが困難なことを理解し（患者同士がつながれる環境を意図してつくる）ことや（他者の体験を通して前を向く患者の力をサポートする）ことで、同じような闘病経験のある【ピアの存在を通して将来を見て歩む力を後押しする】ようかかわりを持っていた。看護師は、AYA がん患者自身がピアの存在や周囲の支えの中で現実を納得し【がんを乗り越え自立して生きていこうとしている価値観に寄り添う】よう配慮し、看護師として、自立を意識し（患者にとって最善の意思決定となるよう共に考える姿勢で添う）だけでなく（がんになった人生を背負い生きる患者の成長を支え見守る）ことや（残された人生を生き切る患者の生活のありようを一緒に探す）ことを行っていた。

表2 AYA 世代がん患者を支える看護相談における相談支援の内容

カテゴリー	サブカテゴリー
患者の将来を意識した治療による妊孕性の影響を重要視した調整	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の妊孕性について納得した方向性を目指し本意を探り調整を模索する ・妊孕性喪失や妊娠・養育にまつわる思いを継続的に支える ・治療に伴うセクシャリティの問題に働きかける
学ぶことの価値と治療の継続が担保されるよう連携調整に努める	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間と一緒に学びたい患者の思いが尊重できるよう奮闘する ・学ぶことが中断されないよう意識して協働体制で対応を探る
がん罹患や治療による影響を受けた就労を再構築していく力を育み見守る	<ul style="list-style-type: none"> ・治療によって直面する就労への影響と向き合う患者のアシストを怠らない ・社会的役割としての就労と向き合う患者の思いを察し後ろ盾をする ・人生にとっての就労の意味を理解し患者と共に最善の方法を探し求める
患者のがん罹患の危機を乗り越える家族単位の力を維持・強化する	<ul style="list-style-type: none"> ・家族員が危機に陥らないよう心身の安定を保てるよう気遣い計らう ・歴史の短い家族が困難に向き合いながら歩む力を査定し強化する ・がんになったことを周囲に理解してもらうことを支持する
がんを乗り越え自立して生きていこうとしている価値観に寄り添う	<ul style="list-style-type: none"> ・患者にとって最善の意思決定となるよう共に考える姿勢で添う ・がんになった人生を背負い生きる患者の成長を支え見守る ・残された人生を生き切る患者の生活のありようを一緒に探す
ピアの存在を通して将来を見て歩む力を後押しする	<ul style="list-style-type: none"> ・患者同士が繋がれる環境を意図してつくる ・他者の体験を通して前を向く患者の力をサポートする
脆弱な心を理解して患者のレジリエンスを支え続ける	<ul style="list-style-type: none"> ・発達段階にある患者の心身の脆さを理解し強さを育んでいく ・予期せぬがん罹患し将来を奪われた心情にある患者を支える ・がんによる喪失体験の中で希望を持てる瞬間を意識する

IV. 考察

1. AYA 世代がん患者に対する相談支援の内容の特徴

今回の研究協力者は、がん患者の相談内容に継続した支援をしてきた看護師であった。看護師らはAYA 世代がん患者の意思決定や問題への対処を見守るといった自立を阻害しない支援を意識して行っていることがわかった。これらのことは、AYA 世代がん患者の発達段階や、心理社会的課題を理解したうえで、患者の個性性を踏まえた丁寧なかかわりを行っていたといえる。

看護師は、AYA 世代がん患者が治療の意思決定を行う過程において患者の将来を意識し【患者の将来を意識した治療による妊孕性の影響を重要視した調整】【学ぶことの価値と治療の継続が担保されるよう連携】を行っていた。これらのことは、看護師ががん患者にとっての人生やライフイベントを意識した支援であるといえる。また、看護師は、【がん罹患や治療による影響を受けた就労を再構築していく力を育み見守る】ことで、がん患者自身が納得した結果が得られるよう時間をかけ継続した支援を行っていた。このことは、看護師が患者の発達段階を意識し自立を支える支援を実施し意図し実践していたと考える。さらに、AYA 世代がん患者にとって、今後の将来を考え【がんを乗り越え自立して生きていこうとしている価値観に寄り添う】だけでなく【脆弱な心を理解して患者のレジリエンスを支え続ける】支援を行っていた。看護師は、こうした支援を通して、患者ががんを罹患した経験をもつ自分として生きていくことを強く後押ししていたと考える。

看護師は【患者のがん罹患の危機を乗り越える家族単位の力を維持・強化する】ことで、患者の心理的安定だけでなく家族の心理的安定を図ることで、家族が患者を支える役割が担えるよう働きかけていた。これらのかかわりは、家族の安定を維持することで患者の支援の強化を図る調

整を行っていたと言える。AYA 世代がん患者にとって家族からの支援は重要であるが、【ピアの存在を通して将来を見て歩む力を後押しする】機会を作り、同じ体験をした他者の経験を通して患者自身のがん闘病の力になるよう働きかけを行っていた。

2. 看護実践における示唆

看護師は、AYA 世代がん患者が人生における様々な経験が少なく対処も未熟なことを踏まえ、患者の脆弱な心を理解しながら、家族を巻き込みつつ、がんを乗り越え生きる患者の価値を大切にしたい支援を積み重ね、AYA 世代がん患者が “今後を生きる” 存在だと意識してかかわりをもっていることが示唆された。

V. 今後の展望

AYA 世代がん患者を支える看護相談における援助モデル開発のための看護師が行っている相談支援の内容を明らかにすることができた。現在、看護師が行っている支援内容をもとに援助モデルの試案を作成中である。

〈学会・論文発表〉

学会発表

・橋本理恵子、今井芳枝：AYA がん患者が発達・心理社会的課題を抱えながらも自分らしく人生を歩むために看護師が行っている相談支援の内容，第 36 回日本がん看護学会学術集会，パシフィコ横浜，2022. 2

論文発表

・論文投稿中

〈謝辞〉

最後に本研究にご参加いただいた皆様、本研究を遂行する上で、多大なご支援を賜りました公益財団法人がん研究振興財団に心より感謝申し上げます。